

マルセル・パニョル
少年時代2

シ ャ ト ウ
母のお屋敷

佐藤房吉訳



少年時代2

シ ャ ト ウ
母のお屋敷

佐藤房吉訳



評論社

少年時代 2 母のお屋敷

昭和50年2月10日 初版発行

¥ 1,500

訳 者 佐 藤 房 吉

発 行 者 竹 下 み な

印刷所 荒 木 印 刷
製本所 新 宿・加 藤 製 本

発 行 所 株式 評 論 社
 会社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町2-16

電話代表 (265) 1961

振替東京 7294

(換印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取替えを致します。 (A-1)

Marcel Pagnol

Souvenirs d'enfance II

Le Château de ma mère

わが肉親の思い出に

M.
P.

母
の
お^シ
屋^ヤ
敷^ト

マルセル・パニョル

少年時代Ⅱ

装幀・装画
風間
完

バルタヴェル【大型の山猪、
一巻参照】にまつわる狩の叙事詩があつてからというもの、わたしはいっぺんで、ハンターとして、父や伯父さんの仲間入りをさせてもらったが、その資格は、勢子せことして、および、猟犬としてのものであった。

毎朝四時頃、父は、わたしの寢室の扉を開けて、ささやくようにこう言う——『おい、行つてくれるかい?』

ジュール伯父さんの轟々たるいびきも、夜中の二時に、乳をほしがつてわめく従弟のピエールの泣き声も、わたしの眠りを突き破るにたる力を持っていなかったが、父のこのささやきを耳にすると、わたしはベッドから跳び降りるのだった。

わたしは、夜の闇の中で、弟のボールの目を覚まさせないように、そっと、服を着る。台所へ降りて行くと、寝起きの大人に特有の、はればつたい、少し血走った目をしたジュール伯父さんがコーヒ

―を温めてい、父は獲物袋に品物をつめている。その間にわたしは、弾帯に葉莖をさしこむのだった。

わたしたちは、物音をたてないようにして外へ出る。ジュール伯父さんは、入口の扉にしつかり鍵をかけると、その鍵を台所の窓のところに乗せ、その上から鑑戸を閉める。

夜明けの空気はひんやりしていた。残っているいくつかの星が、怯えたように、蒼ざめながら、チカチカ光っている。『驚の台』の岩壁の頂きのあたりには、白みかけた夜の闇を縁どるように、白い霧がたなびいている。プティ・トゥイユの松林の中では、梟が、さびしげな鳴き声で、星たちに、さよならを言っている。

わたしたちは、どこまでも曙の光に沿って、ルドゥーヌーの赤茶けた砂礫地帯まで登る。しかし、そこを、音のしないように通り抜ける。なぜかという、フランソワ【土地の百姓、一巻参照】の息子のバティスタンが、竿や鵜もろをたっぷり用意して、頬白を獲るためにそこに『張り込ん』でいるからだ。彼は、よく、髪の中の毛にまで鵜を塗りこんでいるのだ。

それからわたしたちは、インディアン流に列を作って、『バティストの羊小屋』まで、薄暗がりの中を歩いて行く。そこは、わたしたちの友だちのフランソワが、時々、その山羊といっしょに泊まる所だ。そこからは、タウメの山の方へ登りになっている長い高原の上に、真つ赤な朝の太陽が昇るにつれて、松林や、杜松ムズの、またゴシアオイの茂みが少しずつその姿を浮きたたせるのが見え、やがて不意に、霧の中から現われ出る船のように、孤独なタウメの鋭い峯が、その巨大な船首を、わたした

ちの眼前に突き出す。

父と伯父さんは、谷間の方へ降りる。ある時は、左のエスカウプレの方へ、ある時は右のガレットやパス・タンの方へ向かう。

わたしは、台地の縁に沿って、その崖から三、四十メートルのところを進む。わたしは、ハンターたちの方へ、飛ぶ物なら、何でも追い立てる。そして、たまたまうまく野兎でも飛び出して来た時には、崖の方へ駆け寄り、その昔の水夫たちのように、大きく手を振って合図を送る。すると、父たちは急いで駆け登って来て、わたしと合流すると、この耳の長い獲物を、情容赦もなく追いつめるのだ。二度と、もう二度と、バルタヴェルの姿を見かけることはなかった。しかし、口には出さねど、わたしたちは、どこへ行っても、それを捜していたし、とりわけ、狩の殊勲をもたらした、あの神聖な谷間には、それを求めた……わたしたちは、ケルメス柏やハリエニシダの茂みの下を、腹ばいになって、その谷間に迫った。おかげで、山鶉や、野兎や、狸なんかまで、その不意を襲って追い立てることでできたし、ジュール伯父さんは、ほとんど獲物に銃口を押しあてんばかりにして、またたく間に、それらを殲^たしたしたが、あの山鶉の王様たちは、あれ以来、幻の鳥となって、その姿を消してしまっていた——もちろんこれは、そのため、かえって栄光いや増すばかりの、わが父ジョゼフの腕を恐れてのことにちがいなかった。

その名声の上に、どっかと腰をすえた父は、今や、恐るべき腕前の持主になっていた——成功は技能の母、なのである。あれ以後の父は、自分は『キング・ショット』に失敗するはずはないのだとい

う自信を持つようになり、事実、いかなる時にもそれに成功していた。しかも、あまりにも悠々とやつてのけたので、ついには、ジュール伯父さんをして、『こりやもうキング・ショットじゃない、ジョゼフ・ショットだ！』と言わせたくらいだった。

しかし、伯父さんにしても、逃げ足の速いあらゆる獲物——野兎、穴兎、山鶉や鶇など——への『尻撃ち』（と伯父さんは言っていた）にかけては、依然として、天下無双の腕を持っていた。これでは、獲物が逃げようとするのも当り前なのだが、それもこれも、わたしが、射程からはずれてしまうと思った瞬間に、ばった、ばったと殲されてしまうのだった。

わたしたちは、あんまり獲物を持ち帰ったので、ジュール伯父さんは、それを売りに出し、その売上金で——家族全員の拍手喝采のうちに——八十フランの家賃を払ったくらいだ。

この勝利には、わたしも一役買っていたのだ。時々、夕べの食卓で、伯父さんはこう言ったものだ。「この坊主ときたら、犬などおおよびもつかない働きぶりなんだよ。明け方から夕暮れまで、休みなしに駆け回ってくれるんだからね。それも、足音一つたてない、獲物の巢は、一つとして見逃がさないでだよ！ 今日だって、山鶉の一隊、山鶇を一羽、鶇を五、六羽も追い立ててくれたよ。犬と違うところと言えば、吠えないことだけなのさ……」

すると、弟のポールは、自分の肉を皿に吐き出してから、見事に、吠えだててみせた。

ローズ伯母さんがそんなポールを叱っている間に、母は、憂い顔でわたしをみつめていた。

母は、こんな小さな脚で、毎日、そんなに歩かせてもいいものだろうか、考えこんでいたのだ。

ある朝の九時頃、わたしは、ピニイ・デユ・ミユリエの泉を見おろす台地の上を、軽やかに駆けていた。

谷間の奥の方では、伯父さんは、大きな常春藤オズタテの中に身をひそめて待ち構えていたし、父は、丘の中腹にある檜ヒノの木の下のの仙人草のカーテンの陰に隠れていた。

わたしは、手にしている長い杜松の枝——とても堅い木なのだが、脂っぽくて、すべすべしているために、握った感じは柔らかなあの棒で、灌木の茂みを叩いたが、山鶉も出て来なければ、ボーム・スールヌの跳び兎も姿を見せなかった。

それでもわたしは、まじめに、猟犬としての自分の役目を果していた。すると、崖の縁のところ
に、人間の手で、五つ、六つの大きな石を積み上げた石碑のようなものが目に入った。近寄って見ると、その石柱の下に、一羽の鳥の死骸が横たわっていた。その首は、バネ仕掛の罠の、アーチ形の二

本の真鍮線に挟まれていた。

鳥は鶴よりもっと大きかったし、頭にはきれいな飾り羽根が生えていた。わたしが、その鳥を拾い上げようとして、身をかがめた時、わたしの後で、元気のいい声がした。

「おい、君！」

見れば、わたしと同じ年ぐらいの男の子が、きつい表情でわたしをみつめていた。

「他人の仕掛けた罠に手をつけるもんじゃないぞ」彼は言った。「罠ってものはな、他人にやさわらせられないものなんだ！」

「取ろうとしたんじゃないよ」わたしは言った。「鳥を見たかっただけだよ」

男の子は近寄って来た。農家の子だった。髪の毛は茶色で、プロヴァンス地方の人たちに見られる細面ほそおもての顔立ちで、目は黒く、女の子のような長い睫毛まつげをしていた。グレーの毛糸で編んだ古びたチョッキの下に、袖の長い茶色のシャツを着、その袖を肘のところまでまくりあげ、短い半ズボンをはき、わたしと同じく、底が編んだ縄でできているズック靴をはいていたが、靴下ははいていなかった。

「罠にかかっている獲物を見つけたら」と彼は言った。「それを取る権利はあるけど、ちゃんと罠を張り直して、元通りの場所に置かなきゃならないんだ」

彼は鳥を罠からはずしながら言った。

「これはベドゥーイド（後出、ヒバ）だよ」
【リの一稱。】

彼は鳥を雜囊へしまいこむと、チョッキのポケットから、端に不恰好に切った栓をしてある細い葦の管を取り出し、その中から、一匹の大きな羽根蟻を滑り出させて、左手で受け止めた。そして、わたしが見惚れたほど器用に、またその管に栓をした。それから右手の人差指と親指で蟻をつまみ、その間にも左手で軽く押すようにして、罌の中央に仕掛けてある針金の小さな挟みの口を開いた。この針金は半円形に曲っていて、裾が閉じた小さな環を作っている。彼はその挟みに、蟻の細い胴をさし入れた。蟻はこれで逃げられなくなった。羽根の付け根が邪魔になって、後へは退れないし、太い腹が邪魔して前へも進めないのだ。

わたしは訊いた。

「君、こんな蟻、どこで掴まえてくるんだい？」

「こいつは『羽蟻』なんだ」と彼は言った。「どの蟻塚にもかならずいるんだけど、絶対に外へ出て来ないんだ。つるはしを使って一メートル以上も掘らなきゃならない。そうでない時は、九月の最初の雨降りまで待つかなんだよ。雨の後で日が照りだすと、それを待っていたように、いっぺんに飛び出して来る：入口の穴のところに、濡れた袋を当てがって待つてれば簡単にわけさ：」

その間にも、彼は罌を張り直し、それを石柱の裾に、また据えつけた。

わたしは、目を皿のようにして、彼のやり口を見まもりながら、あらゆるこまかい点まで、ぜんぶ頭へしまいこんだ。彼は、やっと立上がると、わたしにこう訊いた。

「君はなんて言うんだい？」

そして、わたしを安心させようと、自分からこう付け加えた。

「ぼくは、リリって言うんだ。ベロン村のね」

彼は笑いだした。

「もちろん、君はベロンの人間じゃないよな！ 町の子だろ。君、マルセルじゃないのか？」

「そうだよ」わたしは氣をよくして言った。「ぼくのこと知ってるのかい？」

「会ったことはないよ」彼は言った。「だけど、君の家の道具を運んでやったのはぼくのパパなのさ。それで、パパから君のことも聞かされたんだ。君のお父さんてのは、例の十二口径の銃でバルタヴェルを仕止めた人だろう？」

わたしは、誇らしきで胸がいっぱいになった。

「そうだよ」わたしは言った。「それがぼくのお父さんさ」

「聞かせてくれよ」

「なにを？」

「バルタヴェルのことだよ。どこで見つけたか、君のお父さんがどうやったのか、なにもかもだよ」

「いいとも！……」

「じゃちょっと待ってくれ」彼は言った。「見回りをすませちまうから」

「ところで君は、年はいくつだい？」

「九つだよ」

「ぼくは八つだ」彼は言った。「君も毘掛けやるのかい？」

「いや。やり方を知らないもの」

「よかったら、教えてやってもいいよ」

「教えて！」わたしは興奮して言った。

「来いよ。今、自分の仕掛けた罠を見回ってるところなんだ」

「今はだめなんだよ。お父さんと伯父さんのために、獲物を追い出しているところだからね。二人とも、下の谷間に隠れてるのさ。そっちの方へ山鶉を追いかまなくちゃ」

「山鶉だったら、今日はだめだよ……この辺にや、ふつう、三組ぐらいの群がいるんだけど、今朝樵きこりの小父さんたちが通って、おどかしちまったからね。二組は、ラ・ガレットの方へ飛んで行ったし、三組目のはパス・タンの方へ降りてしまった……野兎の大きいのなら、追いたてられるかも知れないよ。糞の散らばってるのを見たから」

こうして、わたしたちは、茂みを掻きわけながら、罠の見回りを始めた。

わたしの新しい友だちは、何羽かの腹白——ふつうは、ノビタキと呼ばれている鳥だ——それに、さらに二羽のベドゥーイド（彼は、『雲雀ひばりの一種』だと教えてくれた）と、三羽の『阿呆鳥』を手に入れた。

「町の連中は、この鳥を『イスカ』と言ってるけど、ぼくたちは『阿呆鳥』って言ってるんだよ。」

ばかな鳥だからね：もし、この土地に、たった一羽しかいなくて、畏もたった一つしか仕掛けてないとしても、阿呆鳥なら、きつとその畏を見つけたして、自分から、首を絞められにやって来るよ：でも、こいつ、食べてはうまいんだ」と彼はつけ加えた。「ちえっ！　またトカゲの畜生奴！」

彼は、また別の石柱のところへ走り寄って、すてきなトカゲを拾い上げた。鮮かな緑色をしたやつで、腹のあたりに、細かい金色の斑点が散って、背中には、青い、濃い青色の三日月形の模様がついている。リリは、この見事な死骸を畏から外すと、藪の中へ投げ捨てた。わたしは、それを拾いに走った。

「これ、もらってもいいかい？」

彼は笑いだした。

「そんなもの、ぼくにや用はないさ：昔の人たちは、こいつも食べていたと言うし、とてもうまいものらしいんだ。でも、ぼくたちは、冷血動物は食べないのさ。きつと、毒があると思うね：」わたしは、このすてきなトカゲを雑糞に入れたが、そこから十メートルばかり行ったところで捨ててしまった。と言うのは、次の畏にも一匹かかっていたし、この方は、わたしの腕ほども長く、最初のよりも、もっと色鮮かだったからだ。リリは、プロヴァンス語で、なにやら悪態を吐いてから、このトカゲでもからお護りくださいと、マリヤさまにお祈りした。

「でも、どうして？」わたしは訊いた。

「やつらが畏をふさいでるのが見えないのかい？　トカゲがかかってしまったら、小鳥はもうかか